

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	清田 政秋（京都府）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第107号
学位授与の日付	令和2年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条
学 位 論 文 題 目	本居宣長の言語観と仏教言語思想 —「意と事と言とは相称 ^{コトハ} へる物」をめぐって—
論 文 審 査 委 員	主査 田山 令史（佛教大学教授）
	副査 松永 知海（佛教大学教授）
	副査 榎本 福寿（佛教大学名誉教授）

〔1〕論文の概要

清田政秋氏の博士請求論文『本居宣長の言語観と仏教言語思想—「意と事と言は相称^{コトハ}へる物」をめぐって—』は、本居宣長(1730－1801、以下、宣長)の言語観の基礎に、仏教の言語思想を探る。そして、『古事記伝』が言語を論ずるときに見られる「相称^{コトハ}ふ」「意言」「諷誦」といった基礎語の用法を、『俱舎論』や唯識派の言語観と関連付けながら、検討する。ここから、『古事記伝』の、『古事記』に記された古代の事柄は事実であるとする思想が、宣長の言語観に基づき、この言語観に沿ったものであることを明らかにする。こうして、この論文は、江戸期から今に至るまで論じられる宣長の古伝説観を、仏教的言語観という視点から、解明する。

近代、宣長研究の発端となったのが村岡典嗣『本居宣長』(1911)である。村岡にとって宣長は、その実証的文献学の精確さによって日本の学問史に際立つとともに、古伝説を事実とする『古事記』解釈は「文献学の変態」であった。つまり、宣長にあっては「当然幾多の背理、妄説を含んでいる」古伝説が「そのままに、換言すれば、没批評的(kritiklos)に承認され、尊信され」ている。この村岡の批判、「一方に徹底した科学者」であり、一方で「古代人の如くフィロソフィイレイン」しているという宣長観が、後の宣長研究の型となったことを、この論文はまず、確認する。その上でこの論文は、村岡が宣長の二面性を見るところに、宣長の強固な一貫性を見いだす。一貫性の内実は仏教の言語観である。

『俱舎論』や唯識派の議論に、心と事実、そして言葉の、互いに切り離せない関係をたどった後、論文は「意と事と言は相称^{コトハ}ふ」という宣長の言葉の検討に移る。この「相称」の語を、仏典と古典文学にわたって実証的に探索し、宣長の「相称」用法の変遷をたどる。この作業の結果、「相称」が、一体的な関係をいう仏教語であることが示されるのである。

心と事と言葉の一体性から、古代の人々の世界はその言語表現と一つである。こうして宣長は、古代の人々が表現する世界を、それが言葉で表現されるままに古代の事実とするのである。

論文は六章より成る。

第一章はまず、村岡典嗣の宣長論を、村岡が依拠する 19 世紀ドイツの歴史学者、アウグスト・ベークの原典と照らし合わせながら検討する。『文献学的な諸学問のエンチクロペディーと方法論』(1877)は、村岡に文献学の定義を与えている。この定義により、村岡は宣長の学問が古伝説を事実とする「文献学の変態」に陥ったと主張する。ここで論文は、村岡の文献学理解は、ベークの議論の誤読からくると論じ、この上で、宣長の古伝説観と言語観を関連付ける。

第二章は、まず、宣長を改めて仏教に近づけた契沖の言語論を、とくに『和字正濫抄』の「漢文序」によって検討する。契沖に、意と事と言の相称に関する論が見いだされる。ここで俱舎・唯識の言語観、その言語と事物の一体性という思想が検討される。さらに、『古事記伝』言語論の「相称」の語が仏教語であることを、種々の仏典、『古事記伝』再校本、「漢文序」などより、実証的に確認する。

第三章は、宣長が、「言語(ものいい)のさま」という言い方にも現れるように、言葉の音声を重視すること、さらに、「相称」の語も発声を念頭にしていることを受けて、契沖による仏教的な声の思想を、空海の『声字実相義』など、真言密教との関連で論じる。さらに、江戸期における発音への関心の高まりという時代背景を描く。

第四章では、「意言」の語が「相称」と同じく、仏教語であることが、初期の『排蘆小舟』の「心詞」から始まって『古事記伝』刊本の「意言」に至る表現の変遷を追いながら、示される。これをもとにこの章は、言語とその表現対象の一体性という思想を検討する。

第五章は、敬虔な浄土宗徒であった宣長の声についての思想を、浄土宗の儀礼と関連付けて論ずる。

最後の第六章は、村岡典嗣、そしてベークやコリングウッドによる「過去の実実」や歴史観をめぐる議論を通じて、言語と事実の一体的な関係を改めて確認する。

以下に、本論文の目次を掲げる。

目次

序論

第一章 村岡典嗣の本居宣長研究

序

第一節 村岡典嗣とアウグスト・ベーク

- (一) 村岡典嗣『本居宣長』が提起する問題
- (二) アウグスト・ベークの文献学
- (三) 村岡典嗣の「事実」と宣長の言語観

第二節 村岡典嗣以後の宣長研究

- (一) 昭和戦中期の宣長研究
- (二) 戦後の宣長研究

結

第二章 契沖の仏教言語思想と本居宣長

序

第一節 契中の仏教言語思想

- (一) 「漢文序」と真言密教及び俱舎・唯識の言語思想
- (二) 「相称ふ」と「相応」
- (三) 事と言語
- (四) 心と言語

第二節 宣長の言語観－契沖からの継承と革新－

- (一) 言語表現と心
- (二) 意言
- (三) 心と事と言語の関係－「世界の捉え方」－
- (四) 上代人の経験と「実」

結

第三章 契沖に見る仏教の「声の思想」と本居宣長

序

第一節 江戸期音韻論の一側面

第二節 契沖の「声の思想」

第三節 宣長の「声の思想」

結

第四章 本居宣長の言語観と俱舎・唯識思想

序

第一節 「相称ふ」の用法

第二節 心と言語の関係を表す「意言」

第三節 古語と古事の不可分性

第四節 言語と実在の一体性

第五節 古語の真実性

結

第五章 『古事記雑考』の言語観と「声の宗教」としての浄土教

序

第一節 『古事記雑考』の言語観

第二節 「諷誦」と「声の宗教」としての浄土教

第三節 古学の対象としての「奇霊き上代」

第四節 「文字渡り来ラザル以前ノ心」と「心ノ用ヒ方」

結

第六章 『古事記雑考』の歴史観

序

第一節	史書としての『古事記』
第二節	宣長の歴史観に対する村岡典嗣と津田左右吉の見解
第三節	コリングウッドの歴史哲学
第四節	『古事記雑考』の歴史観
結	
結論	
初出一覧	

〔2〕 審査結果の要旨

審査の結果、明らかになったこの論文の評価されるべき点、そして問題点を、以下にまとめる。

本居宣長は、日本思想史において、もっとも重要な人物の一人と見なされる。その研究史は、長く充実している。しかし、仏教に関して取り上げられるのは、宣長の須弥山説批判、随筆『玉勝間』に見られる悟りや両部神道の批判など、断片的で重要性を欠く問題だけであった。一方、この論文が取り上げる宣長の言語論は、初期の歌論である『排蘆小舟』『石上私淑言』の基礎である。『古事記伝』においては、本論文で論じられる「相称」「意言」の語が「一之巻」に、『古事記』読解の方法を説く基礎語として現れるのである。清田氏の議論によって、今後の宣長研究に、俱舎・唯識の言語観、つまりは、仏教という、新しい方向が与えられる可能性がある。かつて踏み込まれることのなかった領域に、歩を進めたことは高く評価される。また、清田氏は、問題とする語を論ずるに当たって、仏典、宣長の著作など、広く渉猟し、実証に徹している。

宣長の、文献学的実証性と、「背理、妄説を含んでいる」古伝説をそのままに事実とする態度、これを二面性と捉える村岡典嗣の影響は長く続いている。この宣長観を、村岡のベーク読解の誤りとも関係付けたこと、これも新しい。今まで、ベークの『文献学的な諸学問のエンチクロペディーと方法論』の原典、その序論と第一部を読み込んだ上で、村岡説を点検することは、行われなかった。

この論文には、以上のように、積極的に評価すべき点があるが、問題を指摘しておく。

まず、宣長と契沖の関わりについて。清田氏は、契沖の言語観を、仏教との関わりで取り上げる。しかし、契沖に関しては国語学的研究の蓄積がある。この方面に言及がないことは、国語学からの強い違和感を招かざるを得ない。契沖は宣長を仏教の言語観に結びつける重要な接点である。論文は、契沖と宣長を、「あひかなう」と「相称へる」という両者の文言で結びつける。しかし、これでは、両者が仏教を介して結びつくという論拠として希薄である。たとえば、契沖の音韻論など、ここに持ち出すことが不可欠なのではないか。契沖は五十音図の完成に深く関わり、宣長がこれを完成するのである。このように、国語学の議論を介して、両者の結びつきが初めて具体的に見えてくるのではないか。

論文は、宣長への仏教の言語観の影響を語る。しかし、この議論で使われるのは、現代の仏教学のテキスト、つまり、仏教言語論と言っても、現代において整

理され、見通しをつけられた仏教である。これによって、論文では、インド古代、バルトリハリから『大日経』、空海から浄厳、そして契沖へという流れが明瞭に語られる。しかし、江戸期の仏教思想、宣長が直面していた仏教が、このような相貌を呈していたか、疑問である。宣長の仏教経験を再構成するには、たとえば、「事彙覚書」「都考拔書」など、初期の著作に散見される仏教的な語彙の出所由来の調査など、宣長を囲む環境の精査が必要である。第五章に、宣長の生活環境の浄土宗的な要素が強調されているが、仏教の影響については、これは状況証拠を出ない。

ベークの議論を村岡典嗣が誤解したとする議論、これはベークの「文献学は所与の知識を学ぶこと」の「所与の知識」の読みが一つの決め手となる。この論文の分析は、過程にやや飛躍が見られ、十分ではない。

本論文には、以上のような問題がある。しかし、『古事記伝』の基礎にある、仏教の影響を示す言語観、これがまた、宣長の古伝説観の基礎であることを、先人のいないところで、できる限り実証的な方法で示した意義は大きい。この論文が、今後の宣長研究に、仏教という足場を設ける発端となることが期待される。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと判断する。